



ばばはちまんぐう 馬場八幡宮

基本データ 住所：常陸太田市馬場町 573-1

公開時間	駐車場	写真撮影	スタンプ	トイレ	雨天時の 展示物変更
15 時 30 分まで	○	×	○	○	なし

※ 一部の文化財は、普段は公開しておりません。

馬場八幡宮の来歴

馬場八幡宮は、天喜^{てんぎ}4 年（1056）、前九年の役に向かう途中の源頼義^{よりよし}が、当地にあった熊野神社の境内に陣を張り、社前に置いた 2 枚の平大石に石清水八幡宮の御神霊を祀り祈願したのが始まりです。主祭神は菅田別尊^{ほんだわけのみこと}（応神天皇^{おうじん}）で、境内には 10 の境内社が祀られています。

平安時代後期以降、この地にて勢力を拡大した佐竹氏は、馬場八幡宮を守護神として崇め、初代の昌義^{まさよし}は社殿を造営し大田郷の総社としました。また、4 代当主の秀義^{ひでよし}は改めて京都石清水八幡を勧進し、以来佐竹氏は同社神前で元服儀式を行うことが習慣になったと言われていました。

その後、20 代当主、佐竹義宣^{よしのぶ}は天正 19 年（1591）に水戸城へ移りますが、その翌年には当社の分霊を水戸八幡宮に奉遷し、社宝である瓶子一對のうちの一つを分納しています。

馬場八幡宮の文化財

○ 馬場八幡宮本殿（附天正 8 年銘棟札） 市指定文化財（平成 11 年 3 月 22 日指定）

本殿は、桁行 3 間、梁間 2 間で、平入正面には大きな向拝が付いており、屋根は入母屋造となっています。天正 8 年（1580）、佐竹氏 19 代当主である義重によって建てられました。佐竹氏は現在の本殿を造営した義重以前にも、初代当主の昌義や 3 代当主隆義が社殿の造営を行っていますが、天正 2 年（1574）に雷火のため焼失し、再建するに至っています。

柱上の木鼻の浮彫文様の各面がすべて異なるなど、躍動感にあふれる室町時代の建造様式を見ることができ、佐竹氏が建立した八幡宮の祖型として貴重です。



馬場八幡宮本殿

天正 8 年銘棟札は、縦 101.6 cm、幅 36.3 cm で霜月朔日の日付を持ちます。表面には、大檀那佐竹

義重の名前と花押が据えられ、両大工の石橋左馬助、吉原修理助や祢宜平元出雲守の名前があります。また、義人と見える名前は、元々義久と書かれていたものの、後世に加筆される中で、義人となってしまった可能性があることが最近の研究で分かっています。裏面には、慶長3年（1598）の遷宮について記されています。

出典：佐々木倫朗「常陸太田市馬場八幡宮所蔵の戦国・織豊期棟札」（『鴨台史学第18号』2022）

○ 古瀬戸瓶子 市指定文化財（昭和48年2月15日指定）

高さ26.1 cm、口径5.4 cm、胴径16.3 cm、底径9.6 cmです。口縁部が一部欠けていますが、形はよく整っていると言えます。瓶子とは、酒を入れて注ぐのに用いる、丸い壺形で口の狭い瓶を指します。箱書には「阿蘭陀焼瓶子 安永五丙申年(1776)九月吉日」とあり、オランダからの渡来品と伝えられていますが、オランダ製ではなく瀬戸焼とみられます。元々は、水戸八幡宮に分納された瓶子と一対であったと考えられます。



古瀬戸瓶子

○ 青銅製扇面 市指定文化財（昭和48年2月15日指定）

縦34.3 cm、横36.4 cmで、応永13年(1406)12月8日に大工七郎三郎家次によって作られた、佐竹氏の家紋と同じ五本骨扇です。神社の正面に紐によって吊るされたとされ、扇面の両端に穴があげられています。表面には「八幡大菩薩」と彫られ、裏面には八幡大菩薩への祈願文が彫られています。作者の家次が、家族の無事息災を八幡大菩薩に祈願したものと考えられます。



青銅製扇面

大工太郎次郎敬白
右意趣者 家次夫婦
子孫繁昌 病患消除
息災延命 家内安穩
心中祈願 夫定成就
五穀豊饒 牛馬春
為恒受快 樂故成
大工七郎四郎敬白

裏面

奉 鑄 御 正 躰
八 幡 大 菩 薩
応 永 十 三 年 丙 戌 十 二 月 八 日
大 工 七 郎 三 郎 家 次 敬 白

表面

集中曝涼 アンケートにご協力ください
こちらから回答可能です
〔各公開場所の受付でも配布しています〕

